



情報の周辺・周辺の情報 (1)

メディア環境がガラリと変わって
みんなに必要なになった
読み・書き・編集の素養

従来のメディア、たとえば新聞を例にとると、1本の記事ができ上がるまで、多くの人の手を経ている。社会部の記者が小さな事件記事を書くことを考えてみよう。

記者が取材しニュースを記事にする。それを社会部のデスクが手直しして出稿する。出先の記者クラブキャップが、その前に目を通してあるかもしれない。社会部から出稿された記事は整理部に回り、整理部員および整理部デスクがチェックしたうえで活字（実際にはコンピュータ文字）になる。棒ゲラと呼ばれる最初のゲラ（校正刷り）を筆者、社会部デスク、整理部員、整理部デスクがチェックし、文章表現、事実関係などを手直しする。その間に校閲部が固有名詞などの点検を行う。ついで新聞の形に組み上げられた大刷りをそれぞれの担当者が最終チェックする。大刷りは編集局長室にも回るから、さらに多くの人の目に触れるし、製作現場や印刷現場の人が思わぬ誤りを発見することもある。

というわけで、1本の記事ができ上がるまでには、少なくとも十数人の手を経ている。それでも思わぬ字句の間違いや固有名詞の誤りが紙面化され、次の紙面で訂正される。

あるいは、1冊の本ができ上がるまでの編集作業を考えてみよう。原稿そのものは作家、評論家、学者などに依頼されるが、その原稿をどんな本に仕立てるかは編集者の仕事である。本の大きさ（判型）をどうするか、活字はどのようなフォントで、どのくらいの大きさにするか。1ページを何行で組み、1行を何文字にするか、そういった基本フォーマット（組版）が、本の印象を大きく変える。どのような紙を使うか、表紙をどのようにデザインするか（どの装丁家に頼むか）、なども編集者の重要な仕事である。

このように従来のメディアでは、1本の記事ができるまでに多くの人の手（目）を経ているし、1冊の本は長い伝統にもとづく編集技術によって作られてきた。それが記事の信頼性や本の存在感を、ともかくも、生み出してきた。それは職人、言わばプロの仕事であった。

それを支えてきたのは、ものを書くことがまだ一部の

人に限られており、それを発表する手段としてのメディアや流通手段も、資本と人手を抱えた組織（企業）に握られていた時代の特殊事情だったと言えなくもない。



一億総ライター、編集者、出版者の時代

インターネットの出現は、そのメディア環境をガラリと変えた。

まずだれもが情報発信できるようになって、ものを書くという行為が万人のものになった。ワープロソフトはその編集機能によって書く行為を身近なものにしてくれたし、自分では書けない漢字も自動的に変換してくれる。書いた記事はそのままメールとなって送られ、あるいはホームページで公開される。その記事内容をチェックする者は、だれもいない。たった一人の作業である。記事の信頼性の保証はきわめてあいまいで、それは、良くも悪くも、自己責任が原則の世界である。

編集という行為のありようも、書くこと以上に大きく変わった。まず、ホームページ（Web）というメディアは、従来のメディアとはまるで違う特性を持っている。私はホームページをよく風呂敷にたとえるが、このメディアは文字も、音声も、映像もすべてを包み込んで、しかもどのような形にも変幻自在である。編集は、情報の送り手段階だけの作業ではなくなり、受け手が自由に改変することもできる。従来の書籍で重視された組版などの固定したデザインの追求は、ほとんど意味がなくなった。

そればかりではない。いまではコンピュータ同士がブラウザなどを通じて相互のデータを自動的に読み取り、再構成する Web サービスの技術が進んで、他人のホームページのデータを利用して、別個に新しいサービスを提供できるようになった（それを可能にしたのが XML という記述言語である）。たとえば、アマゾン・ドット・コム（Amazon.com）のデータをそのまま使って、自分好みの書籍リストを提供するサービスが可能で、アマゾン・ドット・コム（Amazon.com）のデータが更新されれば、自分のホームページも自動的



図-1 日本製のニュースリーダー「NewsGlue」の画面

に更新される。

これはブログ（Weblog の略）にも利用されている。ブログは、言わばホームページの簡略版で、日々の記録や折々の感想などを簡単にホームページにアップできるが、その際、自分の書いた記事の見出しをXML形式で公開することも可能で、こういった技術が普及すると、興味のある全世界のブログの見出しを収集できる。すでにニュースリーダーと呼ばれるソフトが提供されており、関心にそってジャンル分けした見出しをクリックすると、当該ページにジャンプして、それを読むことができる。既読、未読などの印も付けられる。元のデータが新しくなれば、リアルタイムで更新される。これは、新聞などの既存マスメディアにとって大きな脅威ともいえよう¹⁾。

これら急速に進む技術開発が意味するものは、近い将来、個々のホームページは独立した存在ではなくなり、大きなデータベースの一部に組み込まれるということである。それは同時にインターネットで結ばれたサイトのデータは、実質的にすべての人に共有されることも意味する。

一億総ライター、総編集者、総出版者の時代がやってきたともいえるが、事態はさらに先に進んでいるかもしれない。私の関心にそって言えば、1本1本の精度はきわめてあいまいになった多くの記事が全世界に出まわり、その全体を編集する人はいない、ということである。書くことも、編集することも、個人の仕事になってしまうわけで、そこではプロとアマの区別もなくなる。しかも、その作業の多くがコンピュータに委ねられ、人間の手を経なくなっている。

このような状況は、文章の書き方、あるいはメディアの作り方を大きく変えていくだろう。かつて句読点の打

ち方一つで侃侃諤諤の議論をしたような「文章論」は姿を消しつつあるし、美しい文章を書く、自分の作品を世に残すといった思い入れも、電子メディア上では希薄化せざるを得ない。

しかも、こういった事情は既存マスメディアにも跳ね返り、最近では、新聞の文章の質も低下してきたし、明らかにコクもなくなった。縦書きの文章に洋数字を用いること自体、私には理解できないことだが、悪貨が良貨を駆逐するごとく、「活字文化」は、単に本が読まれなくなったということ以上に、質的に、崩壊の危機にあるように思われる。

最近はずべてが電子化され、紙の辞書、事典類が売れなくなったために、出版社には辞書や事典をつくる体力そのものがなくなりつつある。世界遺産と言われるものの多くが、富と権力が偏在した時代に、時の権力者によって、多くの犠牲のもとに作られたものであるように、紙の辞書や事典も、ついには文化遺産になる運命かもしれない。

一人ひとりに必要な「情報編集の技術」

誤字があろうと、文章がまずかろうと、組み方が汚くても、内容がおもしろければいいという意見もあろう。女子高生を主人公とした安っぽい援助交際物語が、ケータイ配信で反響を呼び、単行本化されてベストセラーになっている。

それは万人が「表現の自由」を行使する具体的手段を得たという点ですばらしいと言えなくもないが、これからは一人ひとりがその情報の真偽をよく確かめ、またなるべく美しい文章を書き、見やすい体裁のメディアをつくるように心がけないと、身の回りの環境がどんどんつまらないものになっていく恐れがある。

私が「情報編集の技術」²⁾という本を書いたのは、口幅ったい言い方をすれば、プロの世界で培われてきた編集のノウハウを一般に公開し、そのことで社会全体の編集能力を高めたいという願いからでもあった。その本でもいくつかの例をあげ、また前回のコラムでも少しふれたけれど、ちょっとした心遣いがなければかりに、見る人を混乱させ、「釈然としない」思いにさせられるホームページは枚挙にいとまがない。

これからのIT社会を豊かなものにしていくためには、個人一人ひとりが、個々の現場において努力するしかない。一端デジタル化された情報はひとり歩きしていくのだから、

参考文献

- 1) 最近刊行された歌田明弘「『ネットの未来』探検ガイド」(岩波アクティブ新書)に、新しいWeb技術の話が興味深く紹介されている。
- 2) 矢野直明:情報編集の技術、岩波アクティブ新書。(平成16年1月16日受付)